誰もが抱える悩みをパパッと解決！

福田貴一先生の福が来るアドバイス

“子どもっぽい子”ほど中学時代の過ごし方が人生を左右します！

早稲田アカデミー
千葉ブロック統括責任者
新浦安校 校長 福田 貴一

難関校に合格する子どもは一般的に“大人びている”と言われています。では、“子どもっぽい子”は中学受験を諦め、高校受験で挑戦したほうがいいのでしょうか？
子どもの精神的な成長と中学受験。まずは、この関係について考えてみましょう。

難関中学校に合格する子は“大人びている子”が多い!?

小学生が大学生になるまでには、いくつかの「入学試験（入試）」を経験しなければなりません。一般的に、公立中学に進んだ場合は高校と大学の入試に挑み、私立中学に進学する場合は中学と大学への進学時に入試を経験します。

一言で入試といっても、中学、高校、大学では、合格に影響する要素は大きく異なります。たとえば、中高大（高大）一貫校に進学した場合を除き、多くの子どもたちが経験する大学入試は、受験時の学力と能力だけが問われます。言うまでもありませんが、東大や早慶などの難関国公立私立大学に進学するためにはとても高い学力が必要で、他大学においても学力や能力だけで選抜されると考えてもいいでしょう。一方、高校入試では、中学時代の入試に向けた意識や気持ちがとても大きく影響します。中学1年生から志望校合格を意識し、一生懸命努力すれば志望校に合格することができるのです。

ところが、中学入試の場合は、もちろん学力や能力、意識も必要ですが、何よりも精神的な成長度合いが大きく影響します。言い換えれば、“大人びている子”ほど、難関校に合格しやすいのです。

出題者の意図が読め、複数の段階を経て考えられる

“大人びている子”

なぜ、“大人びている子”ほど、難関校に合格しやすいのでしょうか。

たとえば、国語の文章問題で「いくつかある選択肢のなかから正しいものを選びなさい」と出題された場合、一般的な子どもはその選択肢と文章を何度も読み返し、一致するところを必死に考えます。ところが、“大人びている子”は、一致するところを探す前に、問題の裏にいる出題者を感じ、「この問題にはひっかけがあるだろう」と、そのように思われる選択肢を除くことから始めます。

また、算数の場合も、中学受験では難問と呼ばれる応用問題ほど、基礎的な知識単元をいくつも組み合わせて出題されます。たとえば、「つるかめ算」に「速さ」と「差集め算」を組み合わせた問題などです。このような問題は、一つひとつの知識を持っていることが大前提ですが、解法の過程のなかで、いくつかの要素を上手く使いこなし、順番に考えていく力が求められます。実は、このような考え方ができるためには、精神的な成長が必要なのです。

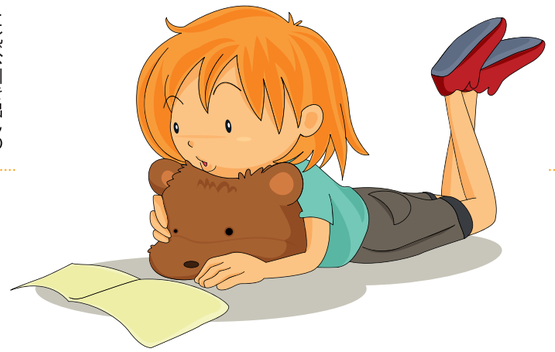
つまり、“大人びている子”は、「何を答えさせたいか」といった出題者の意図をくみ取り、さらには、複数の段階を順序良く解き進める能力があるのです。

“大人びた子”は頭のなかにあるタンスの引き出しが多い

「精神的に成長した状態」とは、頭のなかに知識を入れるタンスがあり、知識がそのタンスにある引き出しのなかできちんと整理できているとイメージしてください。子どもたちは、小学生、中学生、高校生と成長するにつれ、新しい知識を引き出しに入れつつ、入れた知識の出し入れを繰り返すことで、自然に知識を整理していきます。これは洋服を入れたタンスと同じで、もし、知識がきちんと整理できていれば、必要な知識を引き出しから見つけるのは簡単です。ところが、何の整理もしないまま、知識を入れたままにしていれば、いざというときに必要な知識だけをひっぱり出そうとしても簡単には見つかりません。

また、知識を入れる引き出しの数は精神的成長とともに増えるので、幼いほど知識をひとつの引き出しに詰め込むことになり、たとえ引き出しを整理していたとしても見つかりにくくなります。

このように考えると、“大人びている子”は、“子どもっぽい子”に比べ、引き出しの数が多く、さらに、「覚える→整理する」ことを繰り返し行うことで、早い段階で頭のなかにあるタンスの整理ができていると言えるのです。



“子どもっぽい”と中学入試には不利？

“大人びている子”が難関校に合格しやすいならば、“子どもっぽい子”は中学入試に向かない―。一概にそうとは言い切れません。

確かに、12歳の時点で“子どもっぽい子”と高校生が読むくらいの本まで読める“大人びた子”を比べた場合、“大人びた子”のほうが学力的には勝ります。その結果、能力だけで考えれば偏差値65の学校が目指せるにもかかわらず、“子どもっぽい”ために難問を解く力が足らずに偏差値60くらいの学校しか選べない子ども も出てきます。

しかし、子どもたちを受け入れる側である私立中学校に“大人びた子”と“子どもっぽい子”のどちらに入学して欲しいと考えているかを聞くと、意外にも、「中学入試で疲れきっていない子」、「これから伸びていく子」という答えが多くの学校から返ってきます。なかには、「私たちがしっかりと育てるので精神的な成長は全く関係ありません」と言い切り、学力向上だけでなく、精神的な成長を促すカリキュラムを組むことで、着実に大学進学実績を伸ばしている中高一貫校もあります。その理由は、「子どもっぽい子”は12歳の時点で精神的に成長していないだけで、能力がある子ならば、精神的に成長することで、“大人びた子”となんら変わりがないから」とのことです。

中学時代をどんな環境で学ばせるかが子どもたちの人生を左右します！

多くの私立中学校が考えるように、中学受験の時点では、“子どもっぽい子”と“大人びた子”に分かれていた子どもたちも、“子どもっぽい子”がどんどん精神的に成長することで、15歳くらいになればその差はなくなります。高校受験、大学受験は精神的な成長の差がないなかで臨むことになります。

このように説明すると、「だったら、“子どもっぽい子”は高校受験で難関校を目指したほうがいいはず」と思われるかもしれませんが、それは違います。12歳で中学受験をし、難関校に進んだ“大人びた子”は、15歳になればかなりの学力が身についています。しかし、“子どもっぽかった子”で中学受験をしなければ、精神的には追いついても中学受験した子に比べれば学力が身についていません。おのずと選べる高校は変わってくるでしょう。ちなみに、“大人びた子”で中学受験しなかった場合も、受験した場合とでは学ぶ環境が変わりますが、すでに12歳の段階で頭のなかにある引き出しが整理されているため、どのような環境でもそれなりの学力を身につけられます。その結果、難関と言われる大学に合格できる可能性は、“子どもっぽかった子”で中学受験しなかった子に比べれば高くなります。

“大人びた子”と“子どもっぽい子”を比べれば、“大人びた子”ほど中学受験に優位であることは事実です。しかし、“子どもっぽい子”こそ、どんな環境で精神的に成長させ、学力を身につけさせたいかを考えなければならないということは間違いなさそうです。

お便りをお待ちしております
みなさまのお悩みに福田先生が紙面上でお答えします。
下記のアドレスまでお寄せください。
メール：success12@shahyo.com
採用された方には、オリジナル福スタンプを差し上げます。